

## 『朝鮮通信使』

ここで言う、「通信」というのは、自分の意志や様子を他人に知らせ、よしみを通い合わせることを言います。

江戸時代、朝鮮通信使は、合わせて日本に12回来たのですが、その来日の目的は、大きく分けて2つあります。初めのうちは、豊臣秀吉が起こした壬辰・丁酉倭乱（文禄・慶長の役）の終戦処理と徳川幕府の和平真意の探索する目的をもって朝鮮側から来ていました。ところが後には、徳川將軍家が慶事に外国使節を迎え、幕府の権威を内外に誇示するために日本側から進んで来聘し、それに応じる形で来日していたのです。

通信使たちが江戸への行き帰りの際、大坂で多くの文人や学者と交歓したのですが、なぜ、交歓できたのでしょうか。それは、以下の3つの理由からと考えます。

- (1) 大坂は、幕府が大坂城代を置く直轄領で、日本で初めて正式に幕府から慰問と饗宴を受ける所であったこと。
- (2) プサンから航行して来た通信使たちが乗った船が大型の海洋船であるため、陸路への中継地である山城国淀まで行くことができず、そのため、「川御座船」を用いて川口・難波橋・淀へ航行することになっていたこと。
- (3) 朝鮮から来た4隻の船手などの船団要員は、江戸へ上ることが許されず、大坂川口に留め置かれたこと。

## 『九条島』

九条の地は、南浦と呼ばれ「一度風波至れば怒涛の侵食する」砂州でしたが、江戸時代の寛永年間(1624年～1644年)、水理の才能があった幕府の役人、香西哲雲がこの土地の有力者、池山新兵衛の他、彌右衛門・彦兵衛・九兵衛・惣作らの協力を得て、幕府の許可を得たのち開発しました。

この土地は、もとは藪塚村と称していました。「藪塚」の「藪」とは「ちまた」、「塚」は「とち」という意味で、林道春（林羅山のこと・1583年～1657年、道春は法名）が命名したということです。

一説には、藪塚新三郎藤原時直の苗裔(ひょうい=遠い子孫)池山新兵衛即ち藪塚新兵衛尉の開いた土地であるため「藪塚」島と書いたといわれています。

また、「九条」と書いたのは、延寶年間の洪水に際して、本島に一本の笏が漂着しましたが、それが九条家のものであったので、このときから「九条」島と書いたという。



「九条島と朝鮮通信使」の碑